

ミニ漢検で伸ばす

よりよい学校づくりのための塾からの提案⑤

花まる学習会代表 **高濱正伸**

著者紹介 1993年、小学校低学年向けの「作文」「読書」「思考力」「野外体験」を重視した学習教室「花まる学習会」を設立。「小3までに育てたい算数脳」ほか、著書多数。近年、公立学校への支援にも力を入れている。



◆漢字力

公立小学校支援三年目のテーマは「基礎学力の底上げ」とした。中でも「漢字力」に焦点を当てることにした。

塾としてお金を払っていただいて、成績が伸びないなら退塾されてしまう。己の生活ができなくなる、という評価を常に突きつけられながら、子どもたちの学力に責任をもっている、当然ながら基礎学力の向上は、最低限の使命となる。算数脳だなんだとたくを並べたところで、ベースとなる基礎部分が盤石のものとならない限り、思考力の底上げなどできない。楼閣は砂上には建たないのである。

花まる学習会への、地方自治体の議員さんや学校関係の方の見学もしばしばあるが、「意外と普通のことやつてるんですね」という感想もよくいただく。「百ますだけ

〇に分けて、毎学期ごとにミニ漢検方式でテストをするのである。

何だと思われるかもしれないが、到達可能な量に小分けして実施することが、やる気にも結果にもつながり、これを始めてから、会員児童の学力が総合的に大きく伸びたのである。もちろん、言うは易く現実は厳しい。テストとして、少しのクレームも許さないくらい完成させるには、数年のフールドバックと改定の時間が必要だったけれども。

学校の授業内に負担を増やさないよう、各学年の前学年の範囲でのテストとして始めることにした。「家で自力で」の学習、だ

けを頼りにすることにした。
青木小学校の保護者は協力的であった。漢字は大事ですよ。一般に漢字を知らないまま大人になると、本当に恥ずかしい目にあう。そもそも入社試験の一次試験ではじかれてしまうし、仮に入り込めたとしても「こんな字も読めないのか」と馬鹿にされてしまいますよね。そんな将来を見越した語りかけが、効果があったかもしれない。

◆学校文化の壁

一学期末、第一回の実施。さつそく塾で

では、思考力は伸びません」という推薦のコピーを帯につけた「小3までに育てたい算数脳」の印象がよほど強いのもかもしれない。しかし、計算力向上とある種の集中力育成を目的として、百ます的計算は、最初からやっていたし、漢字力アップのための指導は、年々力を入れていった経緯すらある。幼稚園から中学卒業までを、この目で観察できることは、枠組みが自由な塾の強みであるが、長年現場でつかみとってきた経験則というものがある。

「遊びつぶりの良い子は、たくましく育っている」とか「前で人が話し始めたときに、ピッといい姿勢で聞ける子は伸びている」とか「緻密な迷路を作るくらい迷路が好きだった子は、理系で伸びている」とかであるが、その中でも、漢字をマスターすることをきちんとできる子は、ある信頼度で将来着々と伸びていくことがある。

はありえない壁に当たった。素晴らしい指導力で、個人的にも尊敬できる先生から、限りなくクレームに近い質問をいただいたのである。「この字は確かに前の学年で習っているけれど、このヨミはまだ教えていません。問題ミスとして処理してくれないか」という意味のことであった。

「習っていないから出さない」。原則は分かるし、それだけを見たい達成テストならそれでよい。しかし、現実の入試は実力テストであり、検定を始めとした世の実力テストのほとんどは、応用や深化学習は自分でやっておけという内容である。学校独自の文化性であり、世の中に通用しない考えではないかと感じた。

弊塾では「勉強は自分でするもの。一生自力でやっていくもの」と教える。少なくとも、一字教えたら、その多様なヨミや熟語としての使用法などを自力で進めさせることを、恐れるべきではないのではないだろうか。

◆勝負

ややピリピリしたものも漂いつつ、第一回花まる漢検は終了した。結果は予想したものだった。ほとんどの学年は、都会の弊

多分、反復を中心とした面倒な学習をできる時点で、少々嫌なことでも素直にやれるという社会性が育っているということだろうし、努力を厭わないという基本的な型ができてきているだろう。学習の大半は、やるべきことをきちんとやることで克服できる。漢字ができることは、その基礎として中心的課題なのだろう。

また、あらゆる科目の土台として国語力こそは基礎である。問題文を正確に読み取れないければ、先に進めないからである。その意味でも漢字は「基礎の中の基礎」と位置づけられるであろう。

◆ミニ漢検

青木小三年目は、ミニ漢検を実施した。花まる学習会としての秘伝「花まる漢検」の導入である。仕組みは簡単。例えば三年生の配当漢字二〇〇字を、七〇・七〇・六

塾の児童と比べても、ほぼ同じくらいの成績が出ているのだが、ある学年だけが、突出して合格率が低いのである。

実は、これこそが、ミニ漢検を実施しようと思いついた問題意識だった。すなわちこの学年の基礎学力に、大きな不安を抱いたからこそ、「基礎力アップ」などというテーマが出てきたのである。

あれこれ逡巡はあったが、私は勝負をかけることにした。今後の出入りを禁止されるかもしれないとも覚悟して。

秋の授業参観後の講演会で、公表したのである。「現四年生だけが、特別に低い結果になった。前の担任の先生に、大きな責任があると思う」と。

もちろん、相手を信頼できると踏んだからできたのである。四年生二クラスの担任は、気骨あふれるベテランの男性と、若さとやる気に満ちた、澁刺たる女性であった。そのときに思ったのは、きっと私の真の目的を、理解していただけるだろうということだった。

しかし現実には甘くなかった。男性の先生から「ガツカリしました。子どもたちがかわいそうではないですか」と言われたと、部下の社員から、報告を受けたのである。